

## 日蓮大聖人の教義についての一考察

M・I・ヴォロビヨヴァ＝デシャトフスカヤ  
佐藤裕子 訳

仏法者であり、仏教哲学者である「日蓮」(1222～1282)の名は、日本では広く知られているのに対し、ロシアの仏教学者たちの間でその名が聞かれることは今までのところまれであった。しかし、日本の法華経布教史において、つまり法華経が成仏の経典として人々に認められるようになる上で、日蓮が果たした役割は極めて大きい。創価学会インタナショナル(SGI)の基本理念は、この日蓮の解釈による法華経の思想に立脚している。日蓮は、日本語で「太陽と蓮」を意味する。

日蓮が法華経にたどり着くまでは長い道のりであった。日蓮は幼くして天台宗の寺に入り修学に励んだ。続けて全国をまわり、「浄土宗」や「真言宗」、そして「禅宗」など各宗の教義を学び、一切経を閲覧する。だがしかし、どの宗派の教義も日蓮を納得させ得るものではなかった。真実の悟りは言語や文字では伝えることができず、坐禅入定を最第一と考える禅宗の教えをはじめ、各宗派が依拠とするどの経典も釈尊が末法の一切衆生救済のために説いた真の教えではないと日蓮は感じていた。長く深い思索の末ついに日蓮は、仏の真の教えは法華経の中にしかないとの結論に至り、1253年にそれを初めて人々に説いた。

その後の日蓮の生涯は、波乱の連続であった。時の権力は日蓮の教えを用いず、ありとあらゆる迫害を続け、ついには不当な処刑が企てられた。だが、強大な権力をもってしても、日蓮を倒すことはできなかった。悪と不正に対して諸天が動いたのである。日蓮の首を斬ろうとしたまさにその瞬間に、突如として夜空に現れた巨大な光物の接近により刑は中止される。兵士たちは恐れをな

して、日蓮一人をその場に残し、方々に逃げ去った。この法難を機に、日蓮は仏としての本地を覚知し、布教の新たな段階へ歩み出したのである。

日蓮は、法華経の中に仏の最高の教えを見出した。そしてこの教えを多くの衆生に広め、万年の未来に残すため、独自の教義を打ち立てたのである。この日蓮による法華経解釈が事実上、日本における初めての本格的な法華経解釈となり、時とともに極めて重要な意義をもつようになる。その解釈は多くの点で、当時の他宗による法華経解釈と異なっていた。日蓮の教義は難解であるため、SGI会長の池田大作博士は、日蓮仏法を信奉する人々に分かりやすく日蓮の「御書」の講義を行っている。

御書とは、日蓮自身がしたためた手紙と指導の集成である。日蓮は、自分に届けられる弟子や信徒からの手紙のひとつひとつに答えることが自身のつとめであると考えていた。信頼をおく弟子たちに多くの重要な指導を残しているが、この弟子たちの中で最も献身的な弟子であったのが「四条金吾」である。日蓮は彼に「四条金吾殿御返事(衆生所遊楽御書)」<sup>(1)</sup>を書き送っている。また、日蓮の入滅後に、その述作である御書を結集し残したのが第二祖「日興」であった。

池田大作博士による日蓮の御書講義は、一部がすでにロシア語に翻訳されており、ロシアでの出版が予定されている。また、1290頁にのぼる大部の英文御書『The Writings of Nichiren Daishonin』が出版されている(創価学会発刊、アメリカSGI印刷)。英語への翻訳出版は、その出版事業のために設立された特別委員会により実現された。

法華経を信仰の対象および宗教的なシンボルにまで昇華させた日蓮の教義について簡潔にその特徴を挙げてみよう。日蓮は、一切衆生には悟りを得る可能性が秘められていること、すなわち、万人の成仏を確信をもって説いた。これは、大乘仏教の重要な教えのひとつであり、日蓮はその教えを正統に継承していた。日蓮は、成仏に至るための手段として、当時においては新しい方法を提唱した。それは、梵語で‘Saddharma-puṇḍarīka-sūtra’の漢訳である「(南無)妙法蓮華経」という題目を誦する方法であり、この題目こそ日蓮は普遍的な法であると考えた。彼は、その法を曼荼羅「御本尊」として書き表し、その本尊を信受することによって、凡夫は仏の智慧を得、成仏することができる

とした。しかし、曼荼羅が書き表されたのは、立宗宣言した後のことであった。日蓮は、この曼荼羅に自らが悟った小宇宙と大宇宙一体の境地を表現しようと努めた。題目を繰り返して唱える「唱題」行は、現在の日本の創価学会の会員たちに当然の修行として受け継がれている。しかし、この唱題になじみのない我々ロシア人にとっては、まず、この題目について知ることが不可欠である。なぜなら、ここから「法華経」に対する日蓮独自のアプローチが始まっているからである。

御書の中の多くの箇所が、弟子や信徒から寄せられた質問に対する答えに当てられている。質問の中には、「法華経がなぜ諸経の中で最重要の経典なのか」「即身成仏について書かれている章はどれか」といった教義に関する質問とともに、「何遍、またどのくらいの時間、題目を唱えればいいのか」といった修行に関するものも見られる。その中でも、特に我々の関心を引くのが、仏教だけでなく、どの宗教にも関係する「信仰の対象の図像化・表象化」の問題である。

日蓮は、次のように論じている。

「仏に三十二相有す皆色法なり、最下の千輻輪より終わり無見頂相に至るまでの三十一相は可見有対色なれば書きつべし作りつべし梵音声の一相は不可見無対色なれば書く可らず作る可らず、仏滅後は木画の二像あり是れ三十一相にして梵音声かけたり故に仏に非ず又心法かけたり、生身の仏と木画の二像を対するに天地雲泥なり、何ぞ涅槃の後分には生身の仏と滅後の木画の二像と功德育等なりといふや又大瓔珞経には木画の二像は生身の仏には・をとれりととけり、木画の二像の仏の前に経を置けば三十二相具足するなり、(中略)三十一相の仏の前に法華経を置きたてまつれば必ず純円の仏なり云々、故に普賢経に法華経の仏を説て云く『仏の三種の身は方等より生ず』文」<sup>(2)</sup>

また、普賢経の「此の大乗経は是れ諸仏の眼なり。諸仏是に因つて五眼を具することを得る」<sup>(3)</sup>という一節を引いて、日蓮は次のように説明している。

「法華経の文字は仏の梵音声の不可見無対色を可見有対色のかたちと・あ

らはしぬれば顕形の二色となれるなり、滅せる梵音声かへつて形をあらわして文字と成つて衆生を利益するなり」<sup>(4)</sup>

この日蓮の言葉は、次のように解釈することができるだろう。日蓮にとって、経文に残された一文字一文字は、仏陀自身の肉声そのものであったのだ、と。日蓮は、それを仏像では表現することのできない三十二番目の特徴であるとした。この日蓮の考えは時代を何百年も先取りするものであった。法華経に書かれた仏の肉声、仏の言葉は、日蓮にとってどのような宗教儀式や形式よりも重要であった。日蓮の目から見れば、儀式や形式には仏陀の肉声やその心が欠けているのである。

法華経の特質を説明しながら、さらに日蓮は、人間は言葉の力を借りて他人の考えを知ることができる、と述べている。物質的現象には、精神的な側面が反映され、その両方は、互いに関連し合いながら、ある種の一体性を形成している。つまり、経文に書かれた仏の言葉は、物理的には「文字」でしかないが、仏陀の心を反映しているのである。したがって、法華経を読む者は、それを記述された文字の集まりと見るのではなく、仏陀の教えとしてとらえなければならない。

また、日蓮の教えは、その本質において、言葉の力に対する敬虔なる信仰であり、言葉に信を置く歴史上の思想の流れと符合している。言葉の力に信をおくことは、仏教だけに限られたものではなく、現代の我々にも受け継がれている。近代の学術分野においても、言葉の力について、「大衆の心をとらえた理念は、物質的な力となる」という有名な文句がある。

このことから、日蓮は、どの仏教宗派、または仏教以外の教えよりもはるかに早い時期に、言葉のもつ力を深く理解していたことがわかる。

この言葉の力への信仰に異議を唱える天台宗や真言宗の僧侶達に対し、日蓮は次のように反論している。

「今の木絵二像を真言師を以て之を供養すれば実仏に非ずして権仏なり権仏にも非ず形は仏に似たれども意は本の非情の草木なり、又本の非情の草木にも非ず魔なり鬼なり、真言師が邪義・印真言と成つて木絵二像の意と成れるゆへ

に例せば人の思変じて石と成り俱留と黄夫石が如し、法華を心得たる人・木絵二像を開眼供養せざれば家に主のなきに盗人が入り人の死するに其の身に鬼神が入るが如し、今真言を以て日本の仏を供養すれば鬼入つて人の命をうばふ鬼をば奪命者といふ魔入つて功德をうばふ魔をば奪功德者といふ、鬼をあがむるゆへに今生には国をほろぼす魔をたとむゆへに後生には無間地獄に墮す」<sup>(5)</sup>

仏像・仏画に関する日蓮の見解は、他の多くの仏教宗派の教義と根本的に異なっていた。なかでも、後期の「真言密教」(金剛乘)とは大きく相違している。これらの真言密教は、仏や菩薩、その他の善神を描いた画や像を信仰対象として認め、瞑想や恍惚といった精神状態でこれらの神仏と融合する中で、悟りと解脱を得ることができると考えていた。

仏教が、人間の精神面や内面世界のみを対象とし、物質的な側面を対象としないことは一般に広く知られている。天台宗も、娑婆世界における生きとし生ける全ての生命の様相を詳細に解明した。天台のこの理論を受け継いだのが、前にも述べた通り、日蓮であった。「一念三千」の理論を打ち立てた天台に続いて、日蓮は、「三千世間」という計算の仕方を人間の生命状態を説くための概念として応用した。人間の精神状態は変わりやすく、瞬時に三千種類の異なった状態(世間)に変化する。また、人間の器官や細胞のひとつひとつも同時に様々な状態へと変化する。つまり、成長、発展、頂点へと精神状態が高まり、やがて漸進的な低下、衰退、消滅へと向かい、その変化が繰り返されているのである。

日蓮によれば、「(南無)妙法蓮華経」と他経との最も大きな違いは、瞬間に生ずるこのような精神的なプロセスを「(南無)妙法蓮華経」が調整する点にある。法により、肉体的な若さを取り戻すことはできなくとも、精神の力を強くし、耐久力をもつことができる。その結果、老いても若い頃と同じくらい強い精神力を保つことができるのである。日蓮は、「(南無)妙法蓮華経」は、人間を肉体的な死へではなく悟りへと導き、自身の中にある仏性を開花させると説明した。悟達に至るまでの生身の人間に生ずる精神的プロセスについてこのような説明がなされたのは、仏教史上初めてのことであった。

日蓮は自身の人生を例に挙げながら、自説の正しさを強調している。「(南無)妙法蓮華経」は日蓮を苦境や困窮、迫害による落命から守った。権力に対し一貫して諫暁を貫いたにもかかわらず、多くの弟子と信徒を日蓮は得ている。民衆の多くが、日蓮の教えを求めていたのである。

仏法の「時」の立て分けの観点から興味深いのは、「教行証御書」<sup>(6)</sup>に書かれた日蓮の考えである。日蓮は当時を「末法」と見なした。教主釈尊の在世に法華経を聞いた者は皆悟りを得ることができた。悟りを得る時期は、衆生の機根により異なった。正法においては、機根が十分に熟しており、法華経の教えを正しく理解できた者は、悟りを得ることができたのである。しかし、「教、行、証」の立て分けに従えば、日蓮は、末法は教のみが有って行証はない、と考えた。末法には、釈尊の教えを直接聴いた者は誰も残っておらず、行と証が伝わるには、あまりにも長い年月が経っていたからである。

日蓮は、法華経が最高の教えであり、「信心深き者であっても、罪深き者であっても、仏の教えを信奉しようと反発しようと関係なく、万人を救う一仏乗の教えが法華経の眼目に他ならない」と理解していた。このことから、日蓮が仏教における法華経の意義を正しく評価した最初の人物だったことが分かる。

日蓮の「兄弟抄」<sup>(7)</sup>には、このことが次のように記されている。

「夫れ法華経と申すは八万法蔵の肝心十二部経の骨髓なり、三世の諸仏は此の経を師として正覚を成じ十方の仏陀は一乗を眼目として衆生を引導し給ふ」<sup>(8)</sup>

日蓮は、後漢から唐の末期にかけて、初期の頃だけでもすでに、5,048巻が、後代には、7,399巻もの経巻が中国語に翻訳されていたことを修学し知っていた。各経典がそれぞれを最高の教えであると謳っているが、その中であっても法華経は、高く抜きん出た存在である。法華経は、他の経典とは天地雲泥の差があり、かりに他の経典が星だとするなら、法華経は、星空に輝く月である。また、法華経は太陽のように光り輝く教えである。これこそ法華経にふさわしい譬ではないだろうか。

最後に申し上げたいことは、日蓮はその書簡の中で、末法における自身の役割も評価しようとしている点である。日蓮は自らを末法の本仏であると覚知し、その理由として三つの主なその功績を挙げている。まず初めに、繰り返し唱えることで、「妙法蓮華経」との一体感が得られるとした「南無妙法蓮華経」の題目を初めて唱えたこと。第二に、法華経は、仏の教説が完全に説かれている最も肝心で、かつ唯一の正しい経典であり、礼拝すべき経であることを宣言したこと。そして、第三に、「法華経」如来寿量品第十六の文底に秘された、それまで明かされることのなかった深い真意を日蓮が仏教史上初めて正しく理解したことである。付け加えるならば、日蓮は法華経から、釈尊の肉声を聞いていたと言えるだろう。教主釈尊の言葉を生き生きと現代に蘇らせたことも、日蓮の重要な功績のひとつである。

日蓮が、13世紀に最盛期を迎えた儒教の影響を受けていたのではないかといった議論をはじめ、日蓮の教えやその功績に関する本格的な研究は、日本でさらに続けられている。仏教の多くの宗派が、日蓮の教義を受け入れていない。なぜなら、その教えの中に、今日の日本仏教にとって必要不可欠な諸事項、つまり、それらの寺院や僧院、あるいは出家および僧侶そのものの必要性や、寺院や僧侶への供養の必要性について、一切言及されていないためである。

そこで注目されるのは、日蓮がそれらをどうとらえていたかがうかがわれる足跡である。1274年、飢饉やフビライハン率いるモンゴル帝国侵攻の脅威にさらされていた時の幕府は、日蓮がこれらの災いをすでに早い時期に予言し、各宗派の指導者や幕府の有力者たちに対し警告を発していたことを知り、日蓮に他宗同座の国家安泰の祈祷を条件に寺院を建立することを申し出た。日蓮はその勧めを固辞し、鎌倉を去って身延山に入山し、質素な庵を構えたのであった。

現在の日本で、日蓮の教えの真の継承者は、創価学会だけである。

この論文を書き上げた後、私は、池田大作博士による日蓮の御書についての講義の中から、新たにロシア語訳された数編を入手した。そこには、日蓮という傑出した人物が、いかに困難に満ちた人生を生き抜き、苦難や迫害にも屈することなく自身の信念を貫き通したかということが書かれていた。素晴らしい

御書である「単衣抄」<sup>(9)</sup>の中から、このことが伺える一節を紹介したい。

「其の中に父母を殺す者・朝敵となる者・山賊・海賊・数を知らざれども・いまだきかず法華経の故に日蓮程・人に悪まれたる者はなし、或は王に悪まれたれども民には悪まれず、或は僧は悪めば俗はもれ、男は悪めば女はもれ、或は愚人は悪めば智人はもれたり」<sup>(10)</sup>

このような言葉を発することができるのは、真の智者であり勇者だけであると申し上げておきたい。

#### 訳者注

- (1) 創価学会版『日蓮大聖人御書全集』、1143頁
- (2)、(3)、(4) 同、468～469頁
- (5) 同、469～470頁
- (6) 同、1276～1283頁
- (7) 同、1079～1089頁
- (8) 同、1079頁
- (9) 同、1514～1515頁
- (10) 同、1514頁

(M・I・ヴォロビヨヴァ＝デシャトフスカヤ／ロシア科学アカデミー  
東洋学研究所サクトペルブルク支部写本室主事  
(訳・さとう ゆうこ／東洋哲学研究所委嘱研究員)

(本稿は、2001年9月18日に行われたシンポジウムで発表されたものです。)

## 西夏語訳法華経について

西田龍雄

### 1. 西夏語研究と法華経

モリス (M.G.Morisse) の西夏文法華経の研究『西夏文字と西夏語研究初探』(*Contribution préliminaire à l'étude de l'écriture et de la langue Si-hia*, Paris, 1904) が、20世紀初頭の西夏語研究にとって大きい貢献であったことは周知の事実である。モリスは、研究対象にした法華経五巻を北京で入手した。紺紙金泥の見事な写本であった。近代人が整った西夏文資料に出会ったのは、居庸関石刻であったが、最初にまとまった量の経典に接したのは、この法華経である。コズロフが黒城で多量の西夏語文献を掘りあてる3年前のことである。その意味で法華経は、西夏語研究の歴史の中で記念すべき意義をもっている。そして西夏文法華経の研究は、羅福成の研究『西夏訳蓮華経考釈』(京都、1914) が刊行されたものの、その後一向に発展しなかった理由も注目すべきであろう。この経典の西夏文は漢訳本と比較対照して解読しにくい性格があったからである。一言でいえば、他の経典に比べて法華経の西夏文は一段と難解であって、うまく分析できない文法表現を多く含んでいたからである。幸いにして、いまはその困難は解消されつつあり、新たにこの資料の研究に従事できるようになった。因みにモリス旧蔵本法華経は、現在ドイツ (ベルリン) の Staatsbibliothek (巻一、三、四、五、七) とフランス (パリ) の Musée Guimet (巻二、六、八) に分散して所蔵されている。

### 2. 西夏文字の創作と西夏文章語の設定

1036年に西夏文字が公布された事実は、『宋史夏国伝』はじめ中国の史書に記録されていて、学界ではよく知られている。私は、西夏文字の公布はもとよ